

日本語教材の先住民化(Indigenization)・脱植民地化(Decolonization)
プロジェクト

Project for Indigenization and Decolonization of Japanese Language Teaching Materials

金梨花, ブリティッシュコロンビア大学
小林ヒルマン恭子, ブリティッシュコロンビア大学
Ihhwa Kim, University of British Columbia
Kyoko Kobayashi Hillman, University of British Columbia

1. はじめに

1.1 プロジェクト背景

本稿は、ブリティッシュコロンビア大学（以下、UBC）で現在進行中の日本語教材の先住民化・脱植民地化プロジェクトの報告である。UBCは2007年の国際連合総会において採択された「先住民族の権利に関する国際連合宣言」に呼応して、大学レベルでもその宣言を行動に移すための8つのゴールと43の実施目標による戦略的枠組みを構築し、2020年から北米の大学の先頭を切ってその実施を始めた。日本語プログラムのある教養学部(Faculty of Arts)は、2019年から2024年にかけてカリキュラムを先住民化するという計画を発表した(UBC, 2020)。これを受けて2021年に日本語プログラムと中国語プログラムが協同してカリキュラムの見直しを行い、先住民とその土地に直接関係した学習モジュールをデザインし、一部のコースで実験的に開始するという計画がたてられた。ブリティッシュコロンビア（以下、BC）州の高等教育機関の一つでのこのような実践により、毎年5000人以上の日本語・中国語の履修者が先住民族の権利への意識向上のために学ぶことの意義が認められ、日本語科では発表者2名によって日本語教材の先住民化、脱植民地化プロジェクトが始動することとなった。

このプロジェクトの初期段階では新しいコースを新設することが目標ではなく、既存のカリキュラムの中にいかにこのトピックを組み込み、基礎的な知識を蓄積しながら学生の視野を広げ、批判的思考を養成できるかに焦点があてられ議論が進められた。そして初級レベルでは名称やその他実物としての文化財などを教材に可視化することによって先住民族の基礎的な情報に触れることができるモジュールを、中級レベルでは先住民族のコミュニティや社会での文化的慣習について話し合えるモジュールの作成を計画した。上級レベルでは先住民族文化や歴史を通して価値観や世界観などの抽象的な考えについて理解を深め、現代社会が抱える問題について議論するモジュールの導入を目指した。さらに、先住民のアイデンティティや差別に関する問題を始めとしてカナダ、日本、中国だけではなく文化を越えた人権や文化尊重の共通理解に向け、内容に基づく最上級言語学習のコースのデザインをこのプロジェクトの次段階の目標として設定した。

1.2 先住民化・脱植民地化とは

カナダの大学における「先住民化」には現在様々な見解と議論がある(Gaudry & Lorenz, 2018)。本稿では「先住民化」とは先住民の世界観、知識やものの見方が他の世界観と等しく価値があることを認識し、その先住性が表現される機会を明らかにし、先住民族的な思考や行動様式が取り入れられることである(Indigenous Corporate Training inc., 2017)。先住民の知識を保存するという先住民の権利を保護するためには教育システムの大幅な改革が必要である(Battiste, 2013)。一方で、先住民の知識や世界観が研究や初等～高等教育のシステムに取り入れられる教育の先住民化が早急に求められている。また、「脱植民地化」とは植民地化の影響を脱することであり、教育における脱植民地化とは現在も教育現場に存在するかつての植民地主義の教育への影響に向き合い、抗議することである。学校はかつて植民地主義における同化政策の道具として使用された。現在でも植民地主義はよりかすかながら、しばしばカリキュラム、権力関係、組織内に受け継がれている(University of Victoria)。

このプロジェクトでは日本語教材に先住民の思考や行動を取り入れ、指導教材が孕む植民地主義が残した認識や歴史及び現在に対する西洋（または旧宗主国）中心的な視線を修正していくことである。

カナダでは特に近年、「先住民化」、「脱植民地化」「真実と和解」という言葉が頻繁に使われるようになったが、現代の社会の主流派に入る人にとって身近に植民地主義の遺産を感じる場面は少ないかもしれない。植民地政策が現代社会に及ぼす影響に気づけないのは、植民地主義の下で搾取・略奪を受け、差別、暴力を受けていた人々の存在が不可視化されていることが原因の一つだ。可視化とは、先住民族の人々の存在そのものへの着眼だけを言うのではなく、主流社会の中にある無視や差別を明らかにしていくことが先住民化、脱植民地化による和解に近づくために必要だと考える。しかし言語教育一般、そして日本語教育においては着眼すら十分にされていないのではないだろうか。

カナダで日本語教育に携わるとき、「日本」や「カナダ」を題材に教室活動や教材作成を行うことが多いだろう。そのとき、教員の視点はどこにあるのだろうか。「日本」はスシ・ニンジャ・フジヤマのような西洋からの視点や記号を日本語教師が内在化していないだろうか。日本人「らしい」見かけや名前でないと考えられる人を「日本人」の枠から無意識に排除する一方で、日本に住んで日本語を第一言語として話す人はすべて「日本人」だとひとくくりにしていないか。そして「正しい」日本語の使用によって「ネイティブレベル」を目指して「日本人」に近づくことが言語活動の「成功」であるとしていないだろうか。同様に、カナダを固有の意味から切り離して現在の国境で囲まれた土地に限定し、近代に開発された観光名所や表面的な「多文化主義」に代表させているということはないだろうか。

「日本」「カナダ」のいずれへの扱いにおいても、日本語教育が過去の同化政策の延長による民族の否定や排除を続けていないか、その影響の拡大に無関心による加担を促していないのか、早急にかつ組織的に検討することが求められている。

言語教育のカリキュラムはしばしば指定された教材が持つ学習項目や時間数によって制限されており、その中では多様な存在のすべてを一度に提示するのはおよそ現実的ではない。しかし日本語のコースでも直接的・間接的に先住民の題材を取り入れるのは容易ではなくても不可能ではない。先住民を教材の中に可視化しながらカナダ、日本、ひいては世界の先住民の権利への意識を高めるためには、個々の教師の主体的な姿勢も求められるが、カリキュラムとしての一貫性と持続的な開発も必要である。

2. 実践内容

日本語教材の先住民化を試みるとき、既存のカリキュラムやクラス活動と入手可能な資料を考慮するとカナダの先住民族についての題材を日本語のクラスに直接導入するのは様々な障壁が存在する。そこで、日本語プログラムでは既存の教材との連続性を保つことが可能なモジュールを検討した。ここでは本プロジェクト初年度であった2021年度に行った中級後半と上級のコースでの実践内容について報告する。

2.1 中級後半レベル

中級後半レベルでは日本の先住民族であるアイヌ民族について学ぶモジュールの開発を行った。カナダの先住民族の知識について日本語で学ぶよりも、日本の先住民族について日本語で学び、そこからカナダの先住民族を含む学生それぞれの知る先住民族について考え、その共通点や相違点について学生自らが考える活動にも意義があると考えたからである。教材は、北海道登別市のアイヌ文化紹介ウェブサイト（登別市、2013）を基にアイヌ民族とその歴史について学べるものを選択した。UBCの中級総合日本語のコースには集中コース（50分の対面授業が週8コマ、13週）と非集中コース（50分の対面授業が週4コマ、13週）があり、どちらもJapan Times社の『中級の日本語』を指定教科書として使用している（三浦・マグロイン花岡、2008）。この教科書の第10課の「国内旅行」と題する旅行案内の読解教材に北海道のアイヌの村についての一文がある。そこでこの読解が終わった直後に50分の2コマを本プロジェクトのモジュールを学ぶ時間にあてた。（実施日と各コースの履修者数は表1を参照。）

読み物の教材は、語彙リストの後に300～500字に区切られた内容を読み、質問に答える形式を取り、ペアワークと全体の活動を通して徐々に内容が理解できるように計画した。（読み物の各セクションのタイトルについては表2を参照。）読む前にアイヌについて何か聞いたことがあるかを聞き合い、既存の知識について確認してから、読んだ後にもこのモジュールから学んだことやカナダの先住民を含め他の先住民との共通点と相違点を見つけ、話し合う活動を行った。

表1 中級後半コースにおける実施概要

| | 実施日 | コース名 | 学生数 | コマ数 |
|---|-------------------------|------------------------------------|-----|-----|
| 1 | 2021年9月27日(月) 28日(火) | Intermediate Japanese IIA | 18 | 2 |
| 2 | 2022年1月25日(火) 27日(木) | Intensive Intermediate Japanese II | 17 | 2.5 |
| 3 | 2022年7月11日(月) 12日(火) | Intensive Intermediate Japanese II | 11 | 2.5 |

表2 読み物のセクションタイトルと各セクションの字数

| | セクションタイトル | 字数 |
|---|--|------|
| 1 | A. アイヌ民族とは：アイヌ民族とはどのような人々なのか | 295 |
| 2 | B. アイヌの歴史：アイヌ民族はどのように暮らし、どのように歩みを進めてきたのか I. 北海道に人が生活するようになる | 319 |
| 3 | II. 和人が北海道へ：商人の進出と苦しいアイヌ民族の生活 | 418 |
| 4 | III. 国の同化政策とアイヌ自身による教育 | 396 |
| | | 1428 |

この読み物教材の困難な点は、使用語彙や表現が時代的、文化的にやや特殊であり、現代使用されている概念とは異なることもある点である（例、狩猟、採集、交易）。語彙リストを英訳語と併記してもその本当の意味が理解できるとは限らないため、文脈を理解させることやウェブページにある地図や写真などを参考にしながら新出語彙・表現の理解を読み物に進む前に確認した。また、歴史が北海道の約3万年前から19世紀後半まで駆け足で進むため、歴史の第二セクションはビデオなどを使いながら理解を促した。

読み物の最後のセクションが終わったところで話し合いをさせたが、話し合いの内容はコースの学生構成員によって異なった。カナダ出身の学生がいる場合は高校の授業で学んだレジデンシャルスクールについて述べる学生もいたが、それ以前の歴史や現状について知る学生は少なかった。留学生の場合も自分の出身地に先住民にあたる人たちがいる場合はそのことについて述べたが、詳細について知る学生は少なかった。

モジュール直後の話し合いは期待されたほど活発ではなかったが、コースの後半や最後のプロジェクトで学生自らがこのモジュールで学んだ内容に関連するトピックを選んだケースが数例見られた。その例の一つとして挙げられるのは、2021年の秋学期（9月―12月）に実施したコースである。このモジュールを使用した授業は2021年にカナダで初めて施行された「真実と和解の日(Truth and Reconciliation Day)」の直前に行われた。そしてそのコースの期末グループプロ

ジェクト発表会において、UBCのキャンパス内にあるロングハウス（北米インディアンの長屋の建築を使った先住民族の学生の集会や催しができる建物）についての調査・報告がZoom発表の形式で行われ、学生たちがカナダの先住民族事情について日本からの参加者に日本語で説明するという事例が確認された。この際、アイヌの読み物の中で学習した語彙・表現を使用して説明が行われたため、ごく一部の学生の産出ではあるが学習効果は確認された。期末試験や口頭試験にもアイヌのトピックを入れる試みを行い、内容と日本語の両面からの学習効果を確認しているがまだ試用段階のため、その結果報告は他稿に譲りたい。

2.2 上級レベル

上級レベルの読解コース(4年次, Readings in Modern Japanese Essays)では、当初はカナダまたは日本の先住民族の歴史・文化・価値観についての読解教材等を導入することを検討していた。しかし既存のコースの目標、レベル、性質の条件のすべてを満たす適切な日本語教材がすぐには見当たらなかった。そこで間接的ではあるがコースのテーマである「知ること」に沿ったものとして、「芸術」について文化人類学の視点から述べられた一章を2021年度秋学期に試みに使用した。それは、非西洋地域のモノが収集され、「芸術」に仕立て上げられていく非対称的な権力関係に基づく制度について述べ、物質文化の研究や展示について書かれたものである(渡辺, 2019)。この教材に2コマ半をあてクラスで内容確認と議論をした後、議論から学んだことのレポート提出を学生に課した。

折しもその教材がクラスで進行中であった2021年11月3日にBC州のThe Royal BC Museumが展示の脱植民地化計画のために休館することを発表し(Royal BC Museum, 2021)、マスコミにも比較的大きく取り上げられた。それはテキストの理解を深めると同時に学習者それぞれの先住民に対する認識をクラスで共有し、博物館の展示の目的は何なのか、人が博物館を訪れる理由は何かについての議論の大きな助けとなった。本校UBCの文化人類学博物館も先住民の文化や歴史に関する展示物が豊富なことで知られているが、教員を含めたクラスの成員それぞれがそこを訪れた際の体験を振り返り、視覚に頼った先住民族の文化理解の限界を始めとして現代の社会問題、特にレジデンシャルスクールやそれに対するカナダ政府の対応についての活発な議論に至ることができた。さらに政府の謝罪に関連して大戦中の日系人への謝罪にも議論が発展した。結果としてこのコースの先住民化、脱植民地化の第一歩を踏み出すことには成功したと考えるが、履修者13人の半数が留学生であったためか活発な議論の中にも他を非難する発言が目立ち、提出されたレポートには「自分事」としてとらえる姿勢が足りないようにも思われた。

3. 今後の開発計画

短期目標として、中級後半と上級で試みたモジュールの修正、継続と並行し、2022年度は現在準備中の初級と中級のモジュールの実施を検討している。

初級レベルの指定教科書として『げんき 1』『げんき 2』を使用しているが、初級前半（1年次）では先に述べた着眼と可視化を目的とし、身近にあるカナダ先住民族の文化的資産を使用した初級レベルの教材を既存の教材と差し替え、または補足する方向で開発中である。具体例をあげると、カタカナの発音と筆記の練習をする課（第2課）では欧米の国名に加えて先住民の土地に由来する名前を持つBC州の地名のカタカナ表記を用い、色や形の名前の導入（第9課）には先住民の工芸品などの写真を使用するなどである。初級後半（2年次）前半では日本国内の「好きな場所」の紹介文を読む課（第15課）で広島と宮島、沖縄、京都（嵐山、嵯峨野）、東京（渋谷）について書かれた4つの文に「北海道（札幌）」と題して北海道の多くの地名がアイヌに由来していることやアイヌが北海道に住み続けてきたことについてのパラグラフを追加し、前述した中級後半への布石とする。

また、中級（3年次前半）では第8課の読み物で触れられている「鎖国」という概念に挑戦する聴解問題を作成・使用し、当時の朝鮮と琉球王国とは「外国」として外交関係を結んでいたことの確認につなげたい。

4. 今後の展望と課題

以上のように、このプロジェクトは初級から最上級レベルまで調和・調整が取れた教材を開発・導入することにより日本語教材の先住民化、脱植民地化を目指すものである。しかし、既存の日本語教材に導入する先住民族や植民地主義についての知識や議論の場が断片的であるとの批判を免れ得ない。また、学生の中には先住民の問題についておよそ無関心である者もあり、先住民ではない学生と先住民、日本語教育の間の距離を縮める更なる努力が必要である。そのためには同じクラスに先住民族である、または先住民族に深い関わりがある学生がいる場合にはどのような配慮が必要か、または必要ではないのかという議論も必要だろう。そして一方では、日本語を学習し、使用することに歴史的な経緯と「和解」が必要な学習者が存在する可能性も日本語の教員として忘れてはならない。

そのような課題解決の一つの可能性として、先住民族としてのアイヌだけではなく沖縄、在日韓国・朝鮮人や移民問題等を含む日本の多様性についての内容に基くコースを新設することも本プロジェクトの長期目標として検討中である。人文学のプログラムとして言語習得だけにとどまらず、多様な存在の可視化と包括的な社会に焦点をあてることができる。これはアジア研究学科や大学の方針にも沿うものであると期待される。前述の課題や世界の動向に注意しながら慎重に取り組む必要はあるが、日本語教育現場からも積極的に発展的な未来に向けた和解と共生の道を探りたいと考えている。

参考文献

- 坂野永理・池田庸子・大野裕・品川恭子・渡嘉敷恭子（2020）『初級日本語 げんき I 第3版』The Japan Times
- 坂野永理・池田庸子・大野裕・品川恭子・渡嘉敷恭子（2020）『初級日本語 げんき II 第3版』The Japan Times
- 登別市（2013）『ヌプルペツ Nupurpet 登別市のアイヌ文化』2021年8月30日
<http://www3.city.noboribetsu.lg.jp/ainu/>
- 三浦昭・マグローイン花岡直美（2008）『中級の日本語化 改訂版』The Japan Times
- 渡辺文（2019）「モノと芸術」松村圭一郎・中川理・石井三保（編）『文化人類学の思考法』72-84 世界思想社
- Battiste, Marie (2013). *Decolonizing education : nourishing the learning spirit*. Saskatoon : Purich Publishing Limited.
- Decolonization in an Educational Context. (n.d.). Retrieved July 30, 2022 from Centre for Youth & Society, University of Victoria:
<https://www.uvic.ca/research/centres/youthsociety/assets/docs/briefs/decolonizing-education-research-brief.pdf>
- Gaudry, A., & Lorenz, D. (2018). Indigenization as an inclusion, reconciliation, and decolonization: navigating the different versions for indigenizing the Canadian academy. *Alter Native*, 14(3), 218-227.
- Royal BC Museum Announces Upcoming Changes to Core Galleries. (November 3, 2021). Retrieved from Royal BC Museum <https://royalbcmuseum.bc.ca/about/our-work/publications-news/latest-news/royal-bc-museum-announces-upcoming-changes-core>
- University of British Columbia (UBC), Office of Indigenous Strategic Initiatives (2020) UBC Indigenous Strategic Plan. Retrieved from <https://isp.ubc.ca/> (accessed September 2021)
- Working Effectively with Indigenous Peoples®. March 29, 2017. Retrieved July 30, 2022 from Indigenous Corporate Training Inc.. <https://www.ictinc.ca/blog/a-brief-definition-of-decolonization-and-indigenization>